

# 公立普通科3校と市内全中学校が 学力向上の課題や教育への思いを共有

島根県松江市では、2009年から、市を代表する公立普通科高校3校が中心となり、市内にある公立・私立の全中学校との中高連携事業を推進している。

模試のデータを基にした学力・学習意識の課題から、大学入試改革に伴う環境変化まで幅広く情報を共有。中学校と高校間の「壁」を感じながらも、それを乗り越え連携を深めてきた「三校会」の軌跡を追う。

## 生徒の現状把握・共有を 目的として「三校会」が発足

島根県松江市では、2009年から毎年6月、島根県立松江北高校、同松江南高校、同松江東高校の普通科を持つ3校（以下、3校）と、公立・私立の全中学校が一堂に会して、「松江市内中高教科・進路指導研修会」（以下、研修会。松江市内三校教科・進路指導協議会が主催）を実施している。3校で行われたベネッセの進研模試やスタディーサポートの結果を基に、3校に進学した生徒の現状や課題を中学校側に知ってもらうと

もに、中学校の取り組みを高校側が把握することで、中・高のスムーズな接続を目指している。

研修会を提案したのは、当時松江東高校の進路指導部長を務めていた永瀬嘉之松江東高校校長だ。松江市では、以前から中高連絡会が開かれていたが、そこで共有されていたのは高校入試や高校1年生の生徒指導に関する情報が主であり、学力や学習状況について話し合われることはなかった。そうした中、ある年の会で永瀬校長が自校の模試の結果を示したところ、中学校側から「高校生の学習のつまずきを解消するため

には、中学校時代の指導が重要ではないか」といった前向きな意見が出された。「学校種や学区を超えた情報交換の場を持つことにより、市全体で学力向上への意識を高められるのではないか」という思いが、3校による中高連携の取り組みに結実した。永瀬校長は、研修会のねらいを次のように語る。

「県全体の学力向上を考えた時、県を中心とする松江市が課題意識を持つ必要があります。3校の生徒の大半が大学進学を希望しており、中学校でも、そうした生徒の将来を見通した指導をしていただくことが重

要です。中高連携がすぐに指導改善につながると思いませんでしたが、少なくとも高校生の現状を中高で共有することが必要だと考えました」  
そうした課題認識の下、09年6月、松江南高校を幹事校とする「三校会」（松江市内三校教科・進路指導協議会）が発足し、市内全中学校との連携事業が始まった。

## 高校での模試・アセスメント の結果を中学校の指導に活用

研修会の参加者は、中学校は管理職または前年度3学年の担当教師、高校は管理職・進路指導部・1学年

担任。さらに、オブザーバーとして、島根県教育委員会の学力向上事業の担当者が加わる（P.8図1）。

研修会の目的は高校1年生の学力や学習状況の把握であるため、ベネッセの営業担当者も参加し、進研模試やスタディーサポートの結果を基にした学力や家庭学習時間、学習意欲などの現状が報告される。毎回中学校側が注目しているのが、スタディーサポートで分かる学力と学習



島根県立松江北高校校長  
**泉雄二郎** いずみ・ゆうじろう  
教職歴37年。同校に赴任して3年目。「社会貢献意識と学問への憧れを取りに行く学びにつなげたい」

#### 島根県立松江北高校

- ◎2017年に創立141周年を迎える。旧制松江中学校を前身とする進学校。創立以来、4万人を超える卒業生が行政・医療・経済・芸術など幅広い分野を牽引している。
- ◎設立 1876（明治9）年
- ◎形態 全日制／普通科・理数科／共学
- ◎生徒数 1学年約320人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）  
国公立大は、東北大、東京大、京都大、大阪大、鳥取大、島根大、岡山大、広島大、九州大、島根県立大などに188人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ295人が合格。
- ◎URL <http://www.matsuekiita.ed.jp>

習慣の関係（P.8図2）だ。その結果分析によると、松江市内の高校1年生には「学習はそこそこするけれども、成績は伸び悩んでいる生徒」

が多い傾向にあり、そうした生徒にはまず、学習法の改善指導が必要となる。一方、「あまり勉強はしないけれども、成績はよい生徒」も比較的多く、そのような生徒はその後の成績が下がりやすいため、できるだけ早めに手をかけて、学力を維持さ



島根県立松江南高校校長  
**長野博** ながの・ひろし  
教職歴36年。同校に赴任して2年目。「困難から逃げず、生徒に正対して、多くを語ってほしい」

#### 島根県立松江南高校

- ◎1961年、県立松江高校が南北に分かれて創立された。校訓は「質実剛健」「創造進取」「和敬共栄」。「文武両道」を校是として、部活動においても活発に中高連携を進めている。
- ◎設立 1961（昭和36）年
- ◎形態 全日制／普通科・理数科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）  
国公立大は、北海道大、東京大、大阪大、鳥取大、島根大、岡山大、広島大、九州大、鳥取環境大などに200人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西大などに延べ235人が合格。
- ◎URL <http://matsue-minami.ed.jp>

せる工夫が求められる。そのような内容が研修会で共有され、中学校は指導改善に生かしている。

### 中学校の取り組みを 評価しつつ課題も伝える

今では中学校の管理職も積極的に参加し、前向きな意見交換がされているが、初期の頃は一般の教師のみが参加する中学校もあり、研修会の雰囲気は重苦しいものだった。県の



島根県立松江東高校校長  
**永瀬嘉之** ながせ・よしゆき  
教職歴36年。同校に赴任して1年目。「自立した18歳にして卒業させることを目標に、バランス感覚がある指導を」

#### 島根県立松江東高校

- ◎2017年度に創立34周年を迎える。モットーは「師弟同行」。「松江東高校グランドデザイン」を策定し社会を生き抜く力の育成を図る。授業集会、行事前の「黙想」を取り入れている。
- ◎設立 1983（昭和58）年
- ◎形態 全日制／普通科／共学
- ◎生徒数 1学年約240人
- ◎2016年度入試合格実績（現浪計）  
国公立大は、大阪大、神戸大、鳥取大、島根大、岡山大、広島大、山口大、県立広島大などに102人が合格。私立大は、慶應義塾大、早稲田大、同志社大、立命館大、関西学院大などに延べ246人が合格。
- ◎URL <http://www.matsuehigashi.ed.jp>

校長会会長も務める松江北高校の泉雄二郎校長は、こう振り返る。

「中学校の先生方は模試の活用慣れしておらず、教育に数字を持ち込むことへの嫌悪感が見られました。高校側としては現状を共有したいだけなのですが、家庭学習時間の不足や基礎学力の低下などの話が出る度に、中学校批判と受け止められ、反論されることもしばしばでした」

中学校側が消極的だった理由は、普通科高校進学者は全体の3分の1に過ぎず、そのためだけに集まる意義を見いだしにくいことにあった。

「専門高校もあるのに、なぜ普通科高校とだけ連携するのかといった思いは当然だと思います。そうした意識は今も少なからずあり、この点を克服することが、中高連携の成否を分けると考えています」（泉校長）  
そうした中高の意識の違いも、話題が学力一辺倒にならないよう工夫することで、次第に解消していった。泉校長は、中学校の取り組みを尊重する大切さを指摘する。

「以前は、模試の偏差値推移を示

図1 2016年度「松江市内中高教科・進路指導研修会」概要

- ◎プログラム
- 1 「松江3校の現状の報告」  
ベネッセコーポレーション営業担当
  - 2 「小学生・中学生の学力の現状と今後求められる学力について」  
島根県教育委員会教育指導課学力育成スタッフ上席調整監
  - 3 「算数授業改善PTからみえるもの」  
島根県立松江東高校校長 永瀬嘉之
  - 4 グループ別意見交換
- ◎参加校・人数
- 島根県教育委員会3人/島根県教育センター2人/島根県立松江北高校7人/島根県立松江南高校7人/島根県立松江東高校5人/松江市立女子高校2人/松江市立第一中学校1人/松江市立第二中学校1人/松江市立第三中学校1人/松江市立第四中学校1人/松江市立湖南中学校2人/松江市立湖南東中学校1人/松江市立湖北中学校1人/松江市立島根中学校1人/松江市立美保関中学校1人/松江市立八雲中学校1人/松江市立玉湯中学校1人/松江市立宍道中学校1人/松江市立東出雲中学校1人/私立開星中学校3人
- \*「松江市内中高教科・進路指導研修会」の資料を基に編集部で作成

して『進学実績がよくない学年は、入学時の学力が低いので、中学校卒業時まで学力をつける必要がある』といった論調で話していました。しかし、できていない点を指摘するだけでは、中学校側が反発するのは当然です。『スタディーサポートの結果を見ると、高校1年生の多くは中学校段階で学習習慣は身につけている。それを学力に結びつけるためにはどうすればよいか』といったように、中学校の指導の成果やよい点を伝えた上で、課題や解決策を一緒

図2 学力と学習習慣のバランスによる4象限



\*1 学習習慣の到達度は、「学習状況リサーチ」の質問項目で学力と相関の高い項目を点数化し、S1～D3に分類した。  
\*「松江市内中高教科・進路指導研修会」の資料を基に編集部で作成

に考えるようにしたところ、共感を得られるようになりました。互いを認め合うことが、中高連携の第一歩になるのである。

### 大学入試改革の動向や小中連携にも言及

国や県が進める学力向上に関する施策も共有する。15年度の研修会では、大学入試での英語の外部検定試験の活用やスピーキングテストの導入など、大学入試改革について英語を中心に説明し、それに直面する現

中学1・2年生では英語4技能の指導の強化が重要になると中学校側に訴えた。松江南高校の長野博校長は、「中学校では、センター試験までは視野に入れても、大学が個別に行う入試はあまり意識されていません。大学の個別入試で英語の外部検定試験の活用が進んでいる現状などは、中学校の先生方にとって驚きだったのではないでしょうか」と手応えを語る。16年度の研修会では、県の高校数学会の会長も務める永瀬校長が、算数・数学をテーマに講演。島根

県は算数が好きという小学生が全国で最も少ない県といった調査結果などを伝えた。そこには小中連携も進めていく必要があるというメッセージを込めていたと、永瀬校長は語る。「小学校でのつまづきが、中学校で解消されないまま、高校に持ち越されることは少なくありません。講演では、私が見てきた小学校の実態を語り、小中、中高の連携を、一貫性を持って進めていく必要性を伝えました。小中高の学びが連続してこそ、松江市全体の学力の底上げが図られ、3者がWIN-WINの関係になることを、皆で進めていかなければならないと考えました」

### 中高が刺激を与え合う意見交換

研修会では意見交換も行う。16年度は、参加者が1グループ7～8人ずつに分かれ、「学力向上」をテーマに各校の取り組みや教育への思いについて語り合った。「率直に語り合ったことで、中学校の先生方がどのような授業をされているのかや、抱えている課題、悩みなどがよく分かりました。双方の

教師にとって満足度が高い会になったと思います」(長野校長)

長野校長がいたグループでは、教科指導のノウハウを持った高校側から、生徒の学習意欲を高めるコツが語られ、中学校の教師を引きつけたという。また、永瀬校長のグループでは、特別支援を要する生徒に対する中学校の指導の実情が語られた。

「本校にも支援が必要な生徒がいますが、中学校の生徒はさらに多様です。中学校の先生方のきめ細かな指導内容を知ることができ、大変参考になりました。学習面だけでなく特別支援も含めた情報を共有し、高校が指導を受け継ぐことが重要だと、改めて感じました」(永瀬校長)

### 学校ごとの中高連携により 教科での直接交流も始まる

研修会で築いた中高の関係は、各学区内の連携に発展している。3校とも、中学校の教師が高校の授業を自由に参観できる公開授業を実施。さらに、松江南高校では、夏季休業期間に3日間、中学3年生を対象と

した補習指導「南高サマースクール」を行っている。これは、1日50分×3コマで、1日目の1限目は社会・数学、2限目は国語・理科といった時間割を作り、各教科担当を配置。中学生は同校に各自教材を持ち込んで当該教科を自習し、分からないことが出てきたら教師に質問する。当初は中学校1校との取り組みだったが、中学校側の希望により、参加校は3校に増え、16年度は3日間で延べ148人が参加した。

「サマースクールでは、初めて会う中学生に、その場でつまずきの原因を見つけ、それぞれに合った指導をしなければなりません。中学生の理解度や学力レベルがつかめるだけでなく、自身の指導力向上にもつながるため、先生方は前向きに取り組んでいます」(長野校長)

ただ、どの学区においても、中学校側が多忙なため、公開授業の参観者は伸び悩んでいる。そこで、松江東高校では、まずは数学・英語で連携を深めようと、年数回、英語でディベートを行う授業に中学校教師がア

ドバイザーとして参加し、また、高校入学前に取り組む数学の教材を中高共同で作成しようとしている。今後は国語でも連携を深め、読解力向上を図っていききたいと、永瀬校長は語る。

「『大学入学希望者学力評価テスト(仮称)』の国語で記述式の問題が導入されることを見据え、逆算して小中学校で今何をすべきかを考えなければなりません。中高の教師が共同で中学校の作文指導や定期考査の問題を考えることにより、高校入学時に始める学習のレベルが上がると期待できます。さらに、読解力の向上は、数学・理科の学力向上にも波及していくと期待しています」

### 中高が目標やゴールを 共有することが大切

今後の課題の1つは、「三校会」を若い世代に引き継いでいくことだ。「参加校が1校も抜けずに、研修会を続けてきたことは最大の成果です。8年間で築いてきた中高連携の活動をさらに発展させるためにも、若い先生方が中心となり進めていっ

てほしいと考えています」(泉校長) 学習面だけでなく、生徒指導についても取り上げていく考えだ。

「不登校や特別支援への対応は、中高共通の課題です。保護者も巻き込んで市全体で考えていく必要があります」(長野校長)

中学校と高校が目標を共有することが、今後の中高連携の鍵になると、永瀬校長は語る。

「これまでの連携を通して、中間でそれぞれの問題意識は共有できるようになりました。今後は、『どんな生徒を育てたいか』といった目標やゴールを中高で共有することが連携の鍵になると考えています。例えば、『地域で活躍できる人材を育てること』を目標に据えた場合、その目標達成のためには基礎学力に加え、思考力や問題発見・解決力を身につけさせる必要があります。そのように、目標を共有することで、それに向かつて何をすべきか、具体策まで話し合えるようになるでしょう。そういった視点で、今後も中学校とますます議論を深めていきたいと思っています」